

日本を再建してほしいと念願してやみません。

私の戦記

―北支派遣軍谷第四二〇九部隊通信隊―

山形県 小笠原 清 一

私は旧山形県西置賜郡平野村九野本、小笠原家の長男として生まれました。当時の家族は両親と兄弟六人の八人で、専ら農業を主とした生活でした。平野小学校を卒業すると父に代わって、食糧増産に精を出していました。

昭和十七（一九四二）年の七月十日、兵隊検査で甲種合格となり、男子の本懐であり大変嬉しかったです。いつ入営するのかと心待ちをしているうちに、同級生（歩兵）が「俺は十二月に入営する」と言う。また同級生十人程も同じだと聞かされ、私にはまだ通知がなく、待ち遠しい毎日でした。こんなことなら早く志願をしておれば先輩として鼻高々としていられると思うと、くやしさが一段と増して来ました。

そうこうしていると十二月も中旬となった日、役場の兵事係の方が入隊通知を持って来ました。それによると、明年二月、北支派遣軍の通信隊に入隊とのことでした。現地入隊なので誰と誰が一緒に行くのか分からないので聞いて見ますと、後日連絡があるからとのこと、心待ちにしています。雪国ですので積雪も一メートル位降り積り、毎日雪の片付けが日課でした。

一月半ば、役場の兵事係が通達を持って来ました。それには昭和十八年二月十日、盛岡の北部第六十四部隊に午後三時に集合せよとのこと。いよいよ決まったのかと心が引き締まる思いをしました。そして身の廻りの整理をしながら落ち着かない毎日が続き、その間、村からは先輩の方に召集令状が来て見送りもしましたが、私は出征の当日の挨拶を何と言ったらいいのだろうと、そのことばかりが頭の中を駆け廻りました。そして役場、農協、小学校、部落内の挨拶廻りを済ませ、いよ

いよ当日がやって来ました。

当日は天候に恵まれ、大勢の方々が我が家に集まって来てくれました。当地の部落長の司会で式が始まり、一同南を向いて宮城遥拝、君が代合唱、部落長の祝辞に続き入営兵の挨拶となりました。私は張り切つて、勉強していたとおろ無事話し終わることができました。次に万歳三唱をして最寄りの駅まで軍歌を歌いながら送ってくれました。

そこには同年兵二人が来ており三人が同時入営となったので一安心しました。私は親族の方々と温泉旅館に行き、入浴を済ませて祝杯を上げる筈でしたが、当時は戦時下で、酒は夕方五時からでないと出せないと言われました。ところが父親が知人の家から五合位求めて来てくれましたので、やはり親なんだなあーと感心しながら乾杯をして、いよいよ赤湯駅へと向かいました。

毎年のように秋の稲の刈り取り期に手伝いに行っている家の娘がホームにて紙包をくれました。後日開いて見ると一筆「この一銭(戦)何が何で

も勝ち抜くぞ」と書いた紙に一銭銅貨を包んで、御守りの代わりにとくれたのです、思わず熱い物がこみ上げて来ました。

列車は時刻より多少早くホームにすべり込んできました。ホームには私達だけでなく、地区外から列車に乗って来た仲間が大勢おり、発車の時は一段と大きな声で「万歳！ 万歳！」と叫び、その中を列車は一路盛岡へと突っ走りました。

盛岡駅に到着した時も「万歳！ 万歳！」の声で迎えられ、北部第六十四部隊の兵舎に入りました。その日は古参兵の案内で部屋割りをして各班ごとに分かれようやく落ち着き、兵営生活の第一夜を明かしました。翌朝、起床ラッパで整理、週番士官が廻って来て「班員十人異状なし」の点呼があり朝食、初めての軍隊飯は麦七分に米三分の当時の軍隊食でした。

食事が終わると、その日は衣類や武器が渡されました（十人当たり銃一丁）。困ったことには軍靴

である。私はいつも履いていた靴は今の二五センチでしたが、渡されたのは二七・五センチの靴でした。足を入れたらだぶだぶで靴の中で足が上下する。「これでは大きいので取り替えて下さい」と言ったら「軍隊では足に靴を合わせるのではなく、靴に足を合わせる」と言われたことが忘れられない言葉でした。

私は青年学校で週に二日程軍事教練を受けていたので、銃はお前が責任を持って戦地の原隊に行くまで持つようにと言われ一段と緊張しました。やがて一週間の客分生活も過ぎ戦地に出発の日が来ました。完全軍装を整え、当地の護国神社に武運長久を祈願しました。昼食時までに戻らなければならぬので、町内の食堂に分散して昼食をとるようにとの命令でした。

一度に何十人が食堂に入ってもすぐには食べられないと思い、私は食堂の右の方にあつた写真屋へ駆け込み写真を一枚写してもらい、できた写真は私の家にも送ってもらうよう依頼しました。また

「翌朝一時十五分の臨時列車で北支に出発します。元氣で行って参ります」と一筆書いて同封を依頼し、それから食事を取り帰隊に間に合いました。そして一旦兵舎に戻り、明朝の出発を待つこととなりました。

一夜をうとうとと過ごし、夜中十二時三十分起床、真つ暗い冬空の下営庭に整列、部隊長の訓辞があり、いよいよ戦地への出征となりました。

隊伍を整え盛岡駅へ行進、一時十五分発の予定時刻に列車は東北六県から二百五十人位を乗せて一路下関へと向かいました。途中三カ所位、下車して体操で体をほぐしました。土地の婦人会の方々が暗いうちから集まっておられ、お茶のサービスをしてくれました。本当に有難かったものです。

列車は下関に到着、まだ暗いうちに輸送船に乗ったのですが全然勝手が分からず、とくに便所も数が少ないので、いつも満員で大変でした。明朝、

朝鮮の釜山に上陸、そしてまた汽車に乗り一路北へ北へと走りました。

満州の一月と言えば寒さは厳しい。小便がツララになってしまう程です。零下三〇度という。列車は満州の奉天（瀋陽）に着き、二十分位休憩をしました。その時凍っていた線路の路肩を鉄道関係の工夫が、つるはしで掘っていました。やはり満州と言う所は寒いのだなあと思いました。

休憩もそこそこ今度は南の方に下り、満支国境の山海関にて休憩して一路北支の河北省天津に着き、ここで私達五十人程下車して別の列車に乗り替え、徳県にて下車していよいよ本隊の谷第四二〇九部隊通信隊の営門を通りました。

営門の前には古参兵の先輩が出迎えていました。私達は旅団直轄通信隊なので人員は余り少ない。先輩の方は各大隊中隊に派遣されているので少ないとのことでした。それから一期検閲の教育が始まりました。その前に頭の髪の毛と爪を切り、遺言を書くようにと言われ、これは戦死した時の準

備とかで何だか心細い感じでした。

教育も半ば過ぎ、その間古参兵達は時々外出し、ほろ酔い気分で帰って来ます。しばらくすると厳しい教育が連日続きます。

ある日曜日に、初年兵は可哀想だから今日は休養して芸能大会をやるということになりました。我々は有線の十五人(第一班)、それに無線が二班に分かれ計三つの班が我々同年兵で午後から大会が始まりました。私は一班で次に二班、次に三班と順を追って、順番が廻る度に各班から一人宛出て歌います。そのうちに第一班に番が廻って来ましたが、誰も出て行かない。班長が立ち上り「誰かいらないのか」と二、三回繰り返すが誰も出て行く者がいない。その時私が「小笠原やります」と立ち上がったら、ほっとした班長の顔が今でも忘れられません。

一期の教育も無事終わり、今度は一人前の兵隊としてどこに廻されるのかとお互いに話し合っ

ている中に、特殊教育に志願する者はいないのかと言われました。種目は蹄鉄工務兵(主として馬の蹄鉄を作る)、縫装工(衣服の修理)、衛生兵、鉄関係の仕事と四種目でした。それも志願がないので命令で指名されました。

私は蹄鉄工務兵を志願しました。農家育ちのため家畜のすべてが勉強になることと、無事除隊の暁には獣医の資格が与えられるということに志願をしました。

その教育場所は隣の山砲隊で、馬は五、六十頭いました。班長に連れられ部隊長に挨拶に行ったら、時隊長も、老兵なので内地勤務と聞いていたが、一等兵の私が志願をしたというやる気を認められて上等兵に特進しました。職場は各大隊や中隊から集まった五十人の者達で、誰一人知っている者はなく教育も厳しかった。

馬一頭に四人で、前足後足と責任を持って爪を切り、足合わせの金鉄を焼いて叩いて加工し、出来上がったら班長の検査を受けなければ部屋には

戻れないし、食事も喰えず、次の馬を曳いて来てまた仕事にかからねばならない。釘は金靴の内側に二本、外側に三本、計五本で取り付けねばならない。中には釘を打って取り付けているうち右に左にと曲がり使用不能になると隣の相手の釘を盗んで来なければ自分の任務が果たせない。まるで泥棒の集まりのような職場でした。

軍隊と言うところは、支給された物品の員数観念が徹底していて、常に数だけは整えて置かなければならないと教育をされた。だから数が足りなくなったら、よその隊に行って盗んで来ても数を揃えると言うのである。でも班長の身の廻りのことは誰もやらず、ひたすら自分の事で精いっぱいでした。

釘が足りなくなるとやはり班長殿（浅見軍曹）にお願いすると「もし敵が目の前に来たら見て見ぬ振りをしてしまうのか」と、罰として真っ赤に焼けた蹄鉄を火箸で挟み、装蹄場を三回、熱をさ

まさず廻って来いと。夏の熱い時に上半身丸裸なので汗が流れ、そこに火花が飛んで軽い火傷、風呂に入っても体をこすることができない。

そのうち風邪を引き医務室へ行ったら「お前の風邪は普通ではない、すぐ陸軍病院に入院診察だ」と言われ、病院に行ったらチフスの疑いがあると、入院約一カ月、退院間近になった頃、陸軍病院創立記念日に各病棟より芸をするため班長の指示で五、六日稽古をして楽しんだ時もあった。

間もなく退院をすることができ、今度は分遣隊に行くこととなり、初年兵五人程連れて歩兵第三十八大隊の連絡車であるトラックに便乗して出発した。ところが途中の山中で敵襲に会い、直ちに引き上げて来たため全員無事であったのでほっと胸をなでおろし、滄島の第三十八大隊に帰り状況報告をしました。何と言っても五人の初年兵を預かっていたので責任の重大さを感じました。現在のように携帯電話を持っている訳ではないので連

絡の取りようがなかった。

通信隊に帰って当分様子を見ることになったのですが、今度は歩兵第三十四大隊塩山駐屯地に分遣となり、その時は無線兵も一緒だったので安心感があった。そこには三方月程勤務して交代して部隊に帰った。

昭和二十年七月十四日早朝、歩兵第三十四大隊の駐屯地に通ずる六キロある道路の電柱が電線と共に一夜のうちにやられてしまった。

朝食もそこそこに出動となったが、残っている兵隊は我々有線兵六人と鳩班勤務の三人しかない。鳩で連絡を取るため一人を残し、八人で補修工事前電柱電線をトラックに積んで出発することとなった。しかし車の燃料が木炭の木炭車、木のチップを荷台にある釜に入れ、扇風機で送風して木炭の燃焼ガスを利用して走らなければならない。途中で川幅五十メートル位の川があり、その橋を渡った地点から道路が深さ一メートル掘り下げ

られ、寸断されていた。電柱も無い。辺りはこうりやん畑で三メートル位伸び、電線の下は作付け禁止にしてあったのですが、電柱を運んだ車の轍と多くのロバと人の足跡だけが残っていた。そこで部落に行き人夫を依頼した。

部落には親日的な村長がいて十四、五人程の人夫を集めてくれた。早速補修工事に取りかかった。道路を埋める作業、電柱を立てる穴を掘る仕事、電柱用の樹を部落内より切り出す者とに分けて作業を開始していたところ午後二時頃だと思ふ、突然銃声が聞こえ敵襲を受けた。

埼玉県出身の那須上等兵は先頭に立ち、電柱を立てる穴を六〇メートル間隔に印を付けていたが、その那須上等兵に連絡するのに、向こうから自転車で来た住民の自転車を借りて彼を呼び戻し、我々は道路の側溝に避難した。敵の数は約三百人位とのこと。一時敵襲が静かになった時に福島県出身の松本上等兵が道路に上がり機関銃を速射した。敵はその機関銃の勢いに驚いたのか退却したが、

この時はもう駄目か、生きて帰れるとは思わなかった。

二時間位したころ討伐より騎兵隊約五十人程が援護に来た時には敵は退いた後だったが、それからしばらくして平静さを取り戻した。班長は「もう少し作業は続ける。今中止したら敵になめられるから」と、翌日も作業を続行する。

今までの電柱は杉材で真っ直ぐだったのが、今度は代用柱なので太い物、細い物あるいは曲がった物まで使用しなければならぬので作業は困難であった。私は体格も良い方だったので軽機を持って作業全体の中心に立って警戒をし腰には弾薬六十発と外に百発程を木箱に入れて移動警戒をしていた。状況が良くないので有線連絡は中止となり無線に頼ることとなった。

八月に入って南方方面では玉砕のニュースが入って来る。この先我々はどうなるのかと思ってい

る中に、天皇陛下の重大放送があるとのことで、宿舎の前に集合してニュースを聞いたのですが、はっきり聞き取れない。その中日本は連合国に対して無条件降伏をしたんだと言われ、あの時は皆が男泣きをし、がっかりしました。なぜこんな時に神風が吹き荒れなかったかと思うと残念でならなかった。明日は進駐軍が来て武装解除をし炭坑に連れて行かれ死ぬまで重労働させられるとか、種々の情報が飛び交うのでした。

武装解除となると馬も返納しなければならない。現在のところ乾燥飼料の種別を整理しなければならないので、その準備をして置くようにと命令されました。私は工務兵を志願したので、蒋介石軍が武装解除とのことであった。途中八路軍が邪魔をして来られないので、討伐のため通信隊からも参加するよう指示され、弁当に支那の栗饅頭をもらって参加しました。

数日後武装解除となり、今日まで戦友と同じく戦野を歩いて来た愛馬の返納通知があり、我々通

信隊には二十頭位いましたので、各人二頭位ずつ曳いて、駅から無蓋貨車に乗せて行きました。列車は時々急停車したり急発進の繰り返しで、馬が可哀想なので、停車した時に機関士にタバコや色々な物を与えて、何とか返納時刻に間に合わせてもらった。

馬を貨車から降ろして検査したら一頭が体がおかしい、このままでは返納できぬと思い、水を飲ませたり引き運動等をして快復させ、ようやく合格させました。夕方には馬を返納して帰隊しました。負けたとなると何とみじめなもの、武装解除も完全に終わり、集合地まで徒歩で、中隊長はもらった道路地図を見ながらただ黙々と歩くばかりでした。

途中進駐軍の若い兵隊が銃をさかさまに肩に掛け、チューインガムをかみながら我々の通るのを見送っている。関門が二、三カ所あってその度に通行証明書に何百人と印してあるため人員や所持

品の点検等が厳しかった。輸送関係は日本に来るまで全部米兵の仕事でした。我々はタークと言う港から米軍が用意した上陸用舟艇と言って戦車等を運ぶ船に乗船しました。中は体育館と同じで周囲は鉄板でした。三泊四日の船旅で、しかも夜は甲板で映画を見せてくれましたが話す言葉が日本語でないのでも理解できず面白くなかった。

日中は交代で甲板掃除、夜は消灯になると米兵が廻って来て、我々の腕時計をくれとか、珍しい物を見ると何でも欲しがるので隠して置く始末でした。トイレは甲板にドラム缶を二つに切って、その上に板を乗せ、穴を右に三個、左に二個開けて、五人が一緒に用便するように造ってあった。後の人とは背中合わせでやらねばならぬ、船が揺れると時々、お尻を上げねばならない。そのトイレは三方所だけでは充分でなく、こらえ切れない時は物陰に行つて用を足して来る次第でした。

やがて船は玄界灘を通り、故国日本が見えた時

は皆ほっと一安心でした。南方に連れて行かれるのか米本土に行くのか誰も解らないと思っていたのですから。

上陸用舟艇は長崎県の佐世保港に入港、上陸するやまず身体検査となり、進駐軍立合いで、日本の巡査が所持品の検査まで行いました。欲しい物があると「すみませんが私に下さい」と荷物から取り上げ、だんだんと荷物も少なくなってしまうた。

記念にと持って来た物が皆取り上げられてしまった。身体検査には真裸になって体中にDDT粉剤（殺虫剤）を散布され、汗をかくとそれがべとべとして、気持ちが悪かった。それが終わると山一つ越えた元海兵隊の宿舎に行き、ここで風呂に入り、着替えをして一泊しました。

明朝、朝食をすませ後は戦友と別れ、汽車に乗って上野駅で解散とのことでした。駅の高い所から見下ろす空爆の跡、一面の焼野原、敗戦の痛ま

しさが感じられました。それに若い娘が米兵と仲良くたわむれている様を見て、やれやれ敗戦国日本もこうなったのかと思わず怒りが込み上げて来ました。

私達、山形、宮城、岩手、青森の各県の戦友六人は一緒に、福島駅に着いたのが夜おそく駅前通りの家は大部分消灯して寝静まっていました。一軒の旅館を見付け「今晚一晩泊めて下さい。今北支から帰って来た者達です。私達は皆遠い故郷なので今晚は帰れないので」とお願いしたら「それはそれは御苦労様でした。早くお上がり」と気持ち良く承知してくれたので助かったと思いました。

一夜明けて朝食を済ませ、帰宅の打ち合わせをしました。我々敗兵は「只今帰って来た」と言っ

て家に入れるか、それよりも皆で北支の垢を流してきれいな姿で帰宅することとし、床屋で散髪をして福島駅より各々我家へと向かいました。国敗れて山河有り、懐かしい我が家は出征当時と変わ

りなく、「只今戻りました」と玄関を開けますと家族は夕食を食べていました。親父がいないので聞いて見ると、一日も早く復員するようにと近所の人と共に占いに行っていると言う。

翌朝、親父が帰って来て「やっぱり帰って来たなあー」と。占いでは「明日にでも帰って来るから安心していなさい」との事だったそうです。私は無事復員することができましたが、第三男はシベリアに抑留され、その後の消息がわからないと言う。

その後も親父さんはじめ家族の心配は終わらない毎日でしたが、終戦三年目の最後の復員船で弟も帰って来ましたので家族一同喜び合いました。

北支の想い出

滋賀県 山元重一

私は、大正十二（一九二三）年八月二十四日、旧栗田郡治田村下戸山の農家の長男として生まれ、弟三人姉三人の七人兄弟の四番目でした。父は農業は米を主体に、畑には愛知トマト会社と契約してグリーンピースの栽培をし、母と姉が手伝っていました。当地方はグリーンピースの産地として有名ですので、私は学校を卒業すると、満鉄の機関車の部品を作っていた大津市の東洋レーヨン株（当時、現・東レ）の機械課に勤めながら、両親の農業の仕事を毎日朝晩と日曜日にも手伝いをしておりました。

昭和十七（一九四二）年ともなると、太平洋戦争の戦局も刻々と拡大し、私たちの会社には舞鶴海軍工廠より、魚雷の部品の検査ゲージの製作などを受注するようになりました。